

第19回ワークショップ（研究報告）

2012年11月21日開催

■文献¹

- 1) 深田 淳太郎「交換レートの作り方：パプアニューギニア、トーライ社会における貨幣の数え方と払い方」(2012. 11)
- 2) 上村 淳志「アルプール論再考：現代メキシコの男性同性愛者の視点から」(2012.11)

I. 「交換レートの作り方：パプアニューギニア、トーライ社会における貨幣の数え方と払い方」（報告者：深田淳太郎）

■報告者による解説

貨幣は、代数的・数量的スケールと結びついており、それによって世界の量化・平準化を加速するシステムとして理解されてきた。他方で人類学者たちは、非西洋社会の原始的貨幣に、非代数的・非数量的な領域があることを主張してきた。しかしここでは、原始的貨幣に、数量的なスケールにより形成される私たちの日常生活の文脈とは異なる文脈形成のあり方を見いだされる一方で、当の数量的スケールそのものがどのように成り立っているのかについての議論はほとんどなされていない。本論文で筆者（報告者）は、数的な計算とは違うものとして存在しているトーライ社会の貨幣の数え方や払い方を考えることを通して、私たちが自明視している数的なスケールがどのように成立しているのかを再考することを目指した。

以上の説明を受けて、以下のように議論が展開した。トーライ社会における交換実践の「奇妙さ」（「不合理さ」）をどのように理解すべきかという点に、参加者の質問が集中した。

■支払い実践の“奇妙さ”

井頭：タブでタバコを売って大儲けした人物がタブで商品を買って損をするという実践の“奇妙さ”（3章）はどのように理解することができるのでしょうか？6章では葬式会場のようなタブの溢れた場所ではタブのサイズが限定されるために、そのサイズの貨幣を使用しやすいような仕方では価格設定されるから、価格がずれてくると説明がされています。でも、それだけではこの奇妙さを説明することはできないですね。

深田：貝殻の貨幣では交換レートよりも高くタバコを売ることができるのに、買い手はあまり計算しないで支払うのはなぜかというのは、貝殻の貨幣のモノとしての特性

¹ 文献は、本先端研HP (<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~decontext/>) から入手可。

(長さ)によって説明できるように思います。貨幣のモノとしての特性は、葬式でも日常的場面でもそれほど変わらないので、この実践の特性が葬式という特殊な非日常的場面に特徴的なわけでもないです。

井頭：16パラタブのような小さいサイズでも数えないという記述もありますけれど？

深田：数えて受けとる買い手もいるけれど、決して主流ではない。きちんと数えて端数が出ても、その短い切れ端には遣い道がないので、数えないということだと思います。

■支払いにおける二重化

井頭：支払いにおける二重化は本当に起こっているのでしょうか？たとえば、「小片トゥラマリクンが1/4ポコノであるはずなのに、実際にはこういう風に扱っている」という記述は、そうした発想自体が数量的な考え方をベースにしていますよね。数量的な図式を当てはめず、(貝殻ではなく)実践・やりとりがユニットを構成していると考えれば、このような二重化の問題はそもそも生じないのではないですか？

深田：それはその通りです。論述の手順としてここでは一度、数量化のための単位=数字(1/4)を付けていますが、税金の計算実践のところではひっくり返そうとしていて。

井頭：徴税の場面で論じられるキナへの換算でもやはり、1/4ポコノとして徴税人が受けとるという実践が、支払われた貨幣を1/4ポコノとして成り立たせている、という風に考えられますよね。何を単位として考えるかということを経済学図式に乗らない形で扱っているという点では、先のトゥラマリクン計算もキナへの換算も、変わらないように思いました。

■貝殻貨幣の“物質的”特性と量化

大河内：やはり葬儀という非日常的な場面が、特殊な交換のシステムを現象させているように見えます。この特殊な交換システムの特徴が貨幣のモノとしての物質的特性に由来するという主張(p. 18)について、まだピンときていないので、説明して頂けますか？

深田：タブの交換が一番盛んな場面が葬儀の場面であることは間違いありません。ただ、交換される商品と貨幣の対応関係を考えると、貨幣を構成する貝殻の個数あるいはその物質的な幅・サイズによって、価格設定が制約されているように見えるということを感じたのですが。

大河内：物質としての特性というのは、一個一個の貝殻の個数や長さのことで、そしてその長さというものが、部分を組み合わせることで足し算することが出来るような仕方で連続しているものではない、と。すると、そのことと、貨幣は必ずしも対象を量化するものではないという4ページの主張は矛盾することになるのでしょうか？

深田：いえ、貨幣は量化するかもしれないけれども、量化とnumerical scaleを用いた計測が等価なわけではなくて、量化自体にも様々なやり方があり、それに従って作られる数的な秩序も異なってくるだろうということです。それは私たちの代数的な秩序からすれば歪んでいるものかもしれないし、狭いものかもしれないし、間に大きな断絶がたくさんあるものかもしれない。

大河内・大杉：近代的貨幣論(たとえばマルクスの貨幣論)では、商品の使用価値に関わるものとして、商品が一般に持つ物質的な性質が問題にされますね。その関連で言うと、タブの長さが重要という主張は、長さがそもそも連続的な量を表現するもの

なので、タブが（その長さが私たちの考えるような仕方で連続的なものではないとしても）量化したり、記号化しやすい形態を持っていることが重要という意味にとれます。すると、重要なことは、タブが物質としての性質を持つということよりも、量化したり記号化したりしやすい形態を持っている、ということなのではないでしょうか？また、その点で、物質という言葉の使用が曖昧なようにも思えました。物質や性質という言葉は、通常は、量とは別のものを想定させるので。

深田：この議論では基本的には量を、つまり数えるときのユニットという意味で単位と結びつくような形のモノのまとまりを指して、物質という言葉を使っているの、その意味では確かに通常の用法にはなじまないと思います。

■奇妙さをどのように説明するか？——論文・研究のスタンスと射程——

深澤：葬儀の場面のタブの奇妙さというところから論文の問いは発していますが、その奇妙さや不合理性というのがタブの物質としての特性から来ているのか葬儀という場の非日常性から来ているのか、あるいは副次的貨幣のルーズさに由来しているのか、よく分からなくなってきましたね。タブの奇妙さをどう理解すれば、近代的な貨幣論にたいするカウンターとなりうるのか。

井頭：われわれの実践が「計る」ということを成り立たせているという考え方と計算可能な価値秩序があるという考え方が対置されていて、後者の考え方で西欧社会の実践が合理的で、タブを用いた実践が非合理であると説明されることになる。深田さんとしては、普遍的な価値秩序があるという考え方が誤りで実践によって「計る」ということが実は成り立っているというところまで主張したいのではないですか？

深田：手元の素材ではそこまで主張できるか分からないですが、そうしたいとは思っています。

井頭：この論文で、一見奇妙に見える実践の説明を提示していますが、その時の筆者（深田）のスタンスはどのようなものなのでしょう。われわれのの合理性の観点から見て合理的なものとして理解できるストーリーを提示するというスタンスでやっているのか、彼らの実践の実相を描き出すというスタンスでやっているのか……。

深田：基本的には前者ですが、それがこの論文の不徹底さを示しています。われわれの貨幣システムとの対比で「～ではない」という形で奇妙さをネガティブに説明するのではなくて、ポジティブな説明をしたいということから議論が発しているはずなのに、ポジティブな説明にはなりきれていない、という。貨幣を通して売買されることで価格が設定され量化がされるわけですが、その量化のやり方にもバリエーションがあり、そのやり方を支える数的な秩序にも、いわゆる代数的な世界の言葉では表現できないような秩序の形式があり得るということを述べているのですが。ただそれについて、another numerical scaleがある、と言う以上の説明を提出できてはいないんです。

大河内：身体的部位で長さを示して「計る」という実践と数の不連続性（ $1/2$ と $1/2$ を足しても1にはならないというような）が関連していますよね。そうすると、交換の前提からそもそも違うのだ、ということをお願いするように思いました。

深田：マルクスの言うように共通の抽象的価値との関係で共約されて釣り合うから交換されるというのではなく、タブの支払い実践では、あるもの（商品）と別のもの（貨幣？）を置き換えるアナロジーで交換が成立するという側面が強いような気がしま

す。通常は、あるものと別のものが交換されるということの積み重ねがあつて、差益的に中心化されると数量的なシステムが確立されるという順番になっていると思うのですが、貝殻の場合にはそれが確認されにくくなっている。その「長さ」がどのような価値を持つのかということがきちんと計量されず、その都度別の対象に置き換わるだけなので、それぞれの商品がそれとの関連で価値づけられる中心的な共通の価値というののできにくいシステムになっていると思います。

II. 「アルブール論再考：現代メキシコの男性同性愛者の視点から」 (報告者：上村淳志)

■報告者による解説

研究者の記述する文脈と記述対象の実践に内在する文脈との繋がりと違いを意識しながら、論文を執筆した。アルブール (albur) と呼ばれる言葉遊びは、文化批評や同性愛者運動の文脈において男性優位主義や男性同性愛者差別の証左として批判されてきた。だが、そのように批判されてきたアルブールと、ゲイ・アイデンティティを引き受けた人々の間でなされているアルブールでは性質が異なる。その違いをアクティーボ (activo, “能動”) / パッシーボ (pasivo, “受動”) という役割に与えられた意味合いの差異に着目して分析することによって、ゲイを自認する人々の間で政治性と日常実践という異なる文脈がどこまで繋げられ、どこから切断されているのかを考察しようという関心があった。

■男性同性愛行為と性的ファンタジー

井川：結論部で「ジェンダーや性的指向ごとに異なるアルブールとアクティーボ/パッシーボの二分法（以下、A/Pの二分法）の意味合いの違いをきちんと踏まえて、アルブール自体、またメキシコの男性同性愛者や男性同性愛行為を捉え直して行く必要がある」とまとめているのですが、何を（性的）行為と見なすのかを規定しているような広い性的ファンタジーとしてのセクシュアリティは、考察の射程に含まれないのでしょうか？たとえばpenetration =セックスと見なすペニスの特権化は、男性同性愛者の行為を考える場合にも重要になると思うのですが。

上村：実際の実践においては、必ずしもpenetrationが特権化されるわけではありません。たとえば、向かい合って男性器をこすり合わせる「フロット」と呼ばれる行為もあります。そこでは常に権力関係が働いているわけでもありません。けれどもその一方で、アナルセックスのファンタジーが強力に作動している点から、男性同性愛者たちの間でpenetrationの一体化の論理が根強く残っていることも見てとれます。

井川：同性愛者同士の役割分担の必要性からA/Pの二分法が適用されるというのは、一方がアクティーボで他方がパッシーボという風に、役割が固定されているわけではなくても、A/Pの区別があるということですね。継続的に関係を持っているカップルがいて、実際にはpenetrationが行われていなかったとしても、どちらかがAでどちらかがPという。

上村：異性愛者が同性愛者の男性に関わる場合には、A/Pの適用により同性愛者がfeminizeされることが多いのですが、同性愛者同士ではアナルセックスでの役割分

担を越えて、たとえばどちらかが主導権を握るかという交際関係の上位と下位を説明するために、A/Pの二分法が適用されることはほぼありません。役割分担の必要性は、行為における役割のレベルで、強く感じられているということです。

井川：やはり、行為自体という風に最後に強調されると、セクシュアリティの広がり分かりづらくなるような気がします。

大杉：インテルナショナル（A/P両方の役割をこなすもの）という単語は、A/Pの役割が入れ替え可能であることは含意していても、AでもPでもないという、penetrationを特権化しないという態度を含みこむものではないのでしょうか？

上村：原則的には、そうした態度は含みません。フロットのようなものは、インテルナショナルには含まれてはいません。

大杉：フロットのようなものはゲイにとっては通常の性的行為ではない？少なくとも表象上、ゲイというのはアクティープかパッシープのどちらか、penetrateする側かされる側かの、どちらかでしかあり得ないということですか？

上村：誰の表象かに抛ります。異性愛者男性にとってはpenetrationが中心化されますが、同性愛者男性間では必ずしもそうではないけれども最も強力なファンタジーであり続けています。フロットの実践者は僕の知っているなかでも一人ぐらいしかなくて、原則的には役割を入れ替えながらもA/Pのどちらかの役割をとります。

■政治的・学術的言説における／同性愛者男性の日常実践におけるA/Pの区別

大杉：同性愛者男性にとって性的行為のレベルでA/Pの区別が必要であるというのは分かるのですが、それは知的エリートが語っているような政治性の文脈（抑圧、抵抗、対立etc.）とは全く別の所で別の仕方機能しているようにも想定できますよね。この論文では、A/Pが必ずしも男性優位主義的な権力関係を支持するものではなくて、様々な対立に結びついているという話がされていますが、そのような仕方同性愛という性的指向を持つ人たちのA/Pの言語運用の文脈を政治的・学問的な文脈に一元化しているようにも見えます。ゲイの彼らは本当に、自らをA/Pの二分法の被害者であるという風に感じているのでしょうか？

上村：まず、同性愛者男性が、A/Pの二分法を通して自らがパッシープと見なされることによってfeminizeされていると感じていること、そのような言葉で差別を語っていることは確かです。それと、知的エリートたちの言説を分けなければいけないというのはその通りですが。

大杉：同性愛者たちの実際の言語運用を見て行くという折り返し地点に至るまでの所で、彼らに対する象徴的暴力としてA/Pの二分法が働いているのか、当のゲイたちによって実際にA/Pの区別がどのように生きられているのかについて、もう少し記述があった方がいいと思いました。

■アルプールとはどのような言語実践であるのか？

深澤：アルプールというのは、社会または社会関係に、どのような仕方織り込まれているものなのでしょうか。一方的に品がないこととか、下卑たこととか、見なされているわけでもないんですか？

上村：異性愛者男性の間では一般的に、下卑たことだとか、下層階級のものだとか、思われています。

大河内：アルブールの定義が参照されているところで、狭義では、異性愛者が権力関係を支持するものとして機能する言葉遊びとされてきたとありますが、この狭義の定義に対して、実際には、アルブールを同性愛者が用いたり、passiveな立場の人がactiveな立場の人に対して用いたりすることがあるというのが、この論文の主旨ですよ。その場合上村さん自身はアルブールをどのようなものとして理解しているのかを、お聞きしたい。というのも、狭義の定義を採用してしまうと、上村さんが出している事例はアルブールではないということになってしまいますので。

上村：僕自身は、字義通りの意味の裏に性的な意味が含み込まれた言葉遊びとして、広義の定義を採用してアルブールに言及しています。

■アルブールの多様性をどのように理解するか？

大河内：ある種類の言語実践が、それを使用する文脈や話者によって違う権力関係を示したり、文脈化したり、違う形で闘争の道具として用いられたりするという結論自体は、ものすごく当たり前のことのような気がするんです。そうすると、問題設定の所でいえば、アルブールが異性愛者に、あるいはA/Pの二分法ということに、結び付けられて理解されてきたから、この論文に意義があると考えればいいのでしょうか？

上村：そういうことです。

大杉：僕はやっぱり、同性愛者男性の間で使用されるアルブールのやりとりというのは、研究者たちが政治的・学問的な議論の中で言っているような政治的な実践というよりも、別の全く違う実践なのではないかという気がする。

深田：ベルグソンの議論で言うなら、アルブールが使用されるコンテキストが遊びなのかリアルな喧嘩なのかということになりますね。事例を見ると、僕には遊びのように見えるわけなんだけれども、上村くんは、いや、遊びじゃない、という。

熊谷：アルブールを使って、相手が怒ってしまったら「そんな、冗談のつもりだったのに真面目に受けとるなよ」っていう感じになったりするんですか？

上村：なるときはなります。

井川：ダズンズ (The dozenz) の場合は、本気で怒っちゃった方が負けなんです。それ自体は、決裂するためとか、相手をやり込めるためというより、むしろ日常生活を円滑に進めるためのゲームだという、社会学者の研究があるんですが。あと、アルブールは下卑たものだとおっしゃっていましたが、アメリカでも英語圏のエリートたちが好んで汚い言葉を使うことによって、下層階級出身だとかそういう風に思われても構わないだけの社会的地位があることを誇示したり、エリート性を見せびらかすというのがあるんですよ。だからアルブールも、ゲイだと疑われても構わないというだけの地位があったり、あるいはその両義的魅力によって何か利益や見返りがあるという人たちが、好んで使うという可能性もあるかもしれないですよ。

大杉：すごくいい指摘をして頂いたと思うんですよ。アルブールを同性愛者を差別し男性優位主義を強化するものか否かという視点からのみ考えて行くと、現実味を帯びないというか。もう少し褻のあるものだし、遊びとしてあるいは日常生活を円滑にするものとして行われているかもしれない、と考えるのが普通の想像力だと思うので。もし、彼らが本当にゲイであるということを経験として捉えているのだとすれば、そういう特殊な状況というのをある程度手順を踏んで示して頂かないといけなかな、という気がします。

井川：だからあれですね。ゲイのコミュニティに入って行くことも必要ですね。どういうタイプのゲイたちがどういう目的で、どういう発展場に行くかとか。

■ゲイとしてのアイデンティティとA/Pの区別

井川：ゲイとしてのアイデンティティがまだ確立されていない人たち（たとえば農村出身者）が都市のコミュニティに参入する時に、そこでAかPかということが重要になったりしますよね。すると、ゲイであること・ゲイになることと、AかPのどちらかであるということは、切り離して考えることができないように思うのですが。つまり、性自認がある時に同時にこの区別が立ち上がるように思えるのですが。

大杉：異性愛者だったらその問いかけに答える必要はないけれど、同性愛者だったらその問いかけに答えられなくちゃいけないという……。

上村：特に、異性愛者が同性愛者と接する時には、そうです。

井川：異性愛者の同性愛者にたいする思い込みがあるとして、それを同性愛者が反復する可能性もありますよね。でも実際には、あまり見られないということですか？

上村：少なくとも今の都市部のエリート層や都市になじんでいる同性愛者は、パッシーボだとかアクティーボだとか言うことを避けたがるので。「昔は俺はパッシーボだったけれど、今はインテルナシオナルだ」と言いたがりますし。ただ、インテルナシオナルという用語に、アクティーボ／パッシーボの役割が含み込まれているのは確かなので。そこは論文の最後に書いていた通り、予めそこに権力関係を読み込まない、ということだけが、違います。

■言語実践としてアルブールを考えて行くにあたって

安川：アルブールが「言語的ボクシング」という言葉で初めに導入されているんですが、実際の論の展開は、言語実践の話をしているように思えませんでした。たとえば、女性にたいする性的なからかいを“street remarks”という概念を用いて研究したキャロル・ガードナーさんという研究者は、ある発言が二重の意味をもっていて、そのことによってパブリック・ハラスメントが起きているという主張をしていたりするんです。こういう二重の言語って、他にも色々な形でありえますよね。そういう風に言語実践という所から話を広げて行くと、文脈とか用法とかを別の形で考えて行くこともできるわけなので、それを男性中心主義とかそういうものに結び付けることもできないわけではないのだろうけれど、全てそこに直結させる必要はないのかなと思いました。

(了)